

特集

# 知を求めて いざ、長崎へ

【齋藤学長の長崎学】

鎖国時代、西洋への唯一の窓口だった長崎。オランダ船が運び込んだ西洋の文物を受け入れ、全国に発信し続けたこの街は、志ある若者たちの憧れの地でした。彼らは新しい学問や芸術を学ぶために長崎を訪れ、やがて新時代の文化の担い手となつて全国各地にもどり、その知識を広げたのです。他に類のない歴史と風土を持つ長崎。「この街には知を発信する血筋が、今も脈々と流れている」といつ齋藤学長が、独自の視点で長崎学をひもときます。

今回の内容は、毎年1年生を対象に行なわれている齋藤学長の「長崎学」の講義から抜粋、加筆したものです。

## 国際貿易港・ 長崎のはじまりと南蛮文化

1570年(元亀元)の開港により、国際貿易港として歴史の表舞台に登場した長崎。世は戦国時代で、各地では争いが絶えない一方で、西の果ての長崎はポルトガルとの貿易港として賑わい発展しました。長崎はポルトガル船でやってきたイエズス会の宣教師による布教活動で、日本におけるキリスト教の中心地となり、市中には来航した南蛮人へ当時、来航したポルトガル人、スペイン人、イタリア人はこう呼ばれたらが自由に居住していました。教会などゴシック風の建物が並ぶ街角ではパンが焼かれ、まさに日本の中の異国、「小ローマ」のようであったと伝えられています。

さて、当時の長崎には、全国から商人が集まり大いに繁栄しましたが、まもなくキリシタン弾圧がはじまり、南蛮貿易の時代は終焉を迎えることとなります。

## 笈まじを負うて長崎に遊学する

江戸時代に入り、鎖国体制が強化される中、1636年(寛永13)長崎の港に出島が築かれました。当初はポルトガル人を居住させることが目的でしたが、キリシタン弾圧の強化にともない、まもなくポルトガル人は国外に追放され、貿易も禁止

彦馬も、諭吉も。  
長崎で学んだ人々は、  
みな長崎大学の  
OBである。

となりました。それに変わって1641年(寛永18)に平戸から出島に移転してきたのがオランダ商館です。以後、安政の開国(1859)までの218年間、長崎は唯一、西洋に開かれた窓として発展していきました。

オランダ船はさまざまな貿易品と共に多くの西洋の学問や芸術をもたらしました。それは西洋医学、植物学、美術、天文学、物理学、化学、数学、兵学、造船など多岐に渡り、長崎には新しい学問を学ぶために各藩から選ばれた俊秀たちや学者や医者をめざす志ある若者たちが次々に訪れました。

「笈まじを負うて長崎に遊学する」という古い言葉があります。私が若い頃までは折に触れ耳にしたものです。「笈」とは竹で編んだ籠のこと、旅の荷物を入れるもの



吉雄耕牛が寄せた「解体新書」の序文

解体新書(長崎大学附属図書館医学分館蔵)  
江戸中期の蘭方医、前野良沢、杉田玄白らがオランダ語で書かれた医学書「ターヘル・アナトミア」を翻訳し1774年に出版したもの。その後の蘭学の発展に大きな影響を与えた。



吉雄耕牛肖像  
(長崎大学附属図書館医学分館蔵)

です。昔の人々はこれを背負い旅をしたのです。つまり、当時、そういうフリーズが人々の間で生まれ、広く使われるほど、「長崎」という街は遊学故郷を離れよその土地や国に行つて学問することの地として知れ渡っていたのです。

西洋と日本の橋渡し役、

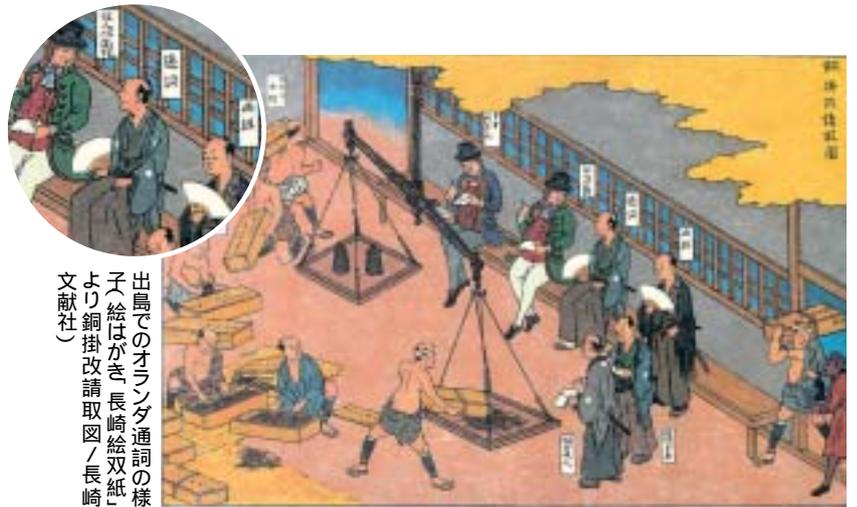
オランダ通詞

17〜18世紀に長崎を訪れた著名人には、林羅山(儒学者)、青木昆陽(蘭学者)、平賀源内(洋学者)、林子平(思想家)、司馬江漢(思想家・洋画家)などがあります。

ここで注目したいのは、ときに彼らの師となり、蘭学を伝えた長崎の地役人、オランダ通詞の存在です。オランダ語のさまざまな情報や書物は、まず彼らが通訳・翻訳し、そつした後に広く国内に伝播していきました。オランダ船が定期的に幕府へ提出した海外の情報を知らせる、風説書も、もちろん彼らが翻訳・清書しました。オランダ船入港から発送までをなんと二両日中にやつてのけたそつです。

オランダ通詞の中には西洋の学問を自ら研究する人もいて、蘭方医や学者として活躍した人もいました。

たとえばオランダ通詞の重鎮として知られる吉雄耕牛。彼は蘭医でもあり、自宅には「解体新書」で知られる前野良沢らをはじめ多くの門下生が入り込んでいたそつです。「解体新書」の序文は吉雄耕牛が寄せていますが、杉田玄白らが師



出島でのオランダ通詞の様子  
子絵はがき「長崎絵双紙」より銅掛改請取図/長崎文献社)

の教えに感謝して依頼したと伝えられています。

江戸時代後期の天文学者で志筑忠雄という人物がいます。彼はもとオランダ通詞でした。のちに著した「鎖国論」で、「鎖国」という言葉をはじめてつくつたことまで知られています。これは17世紀末にオランダ商館医として来日したケンペルが日本を紹介した文を翻訳した際に生まれた言葉だそつです。他にも「ユートンの物理学や天文学を紹介した『曆象新書』」を長い歳月をかけて著すなど、たいへん優れた

学者でありました。

他にも、数々の天文書を翻訳し、「ユートンの地動説を日本に初めて紹介した本木良永」そして、本木正栄や橋本宗左衛門らは、日本初の英語事典「諸厄利亜語林大成」をつくり、フランス語の辞書の制作にも携わっています。彼らは日本における英仏語学者のさきがけでありました。

西洋のさまざまな学問を翻訳した彼らの見識は相当高いものがあつたと推察できます。

実は、この素晴らしい郷土の先人たちに注目して、長崎大学では、平成オランダ通詞を育成する教育プログラムがはじまっています。これは、本学学生とオランダのライデン大学の学生が共に古蘭文を解説し、平成の長崎蘭学研究を興そつというものです。地域の活性化や国際交流の手がかりになることが期待されています。

教育プログラム…文部科学省の平成18年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に選定された。タイトルは「現代・出島」発の国際人育成と長崎蘭学事始(学生・留学生と市民参加による長崎の蘭学研究と文化・地域の活性化)。

**諭吉も海舟も彦馬も学んだ  
長崎は街全体が大学だった**

夢や希望を抱く若者を受け入れた長崎。19世紀前半には出島のオランダ商館付医師として長崎にやってきたシーボルトが鳴滝塾を開きました。この時も、西洋の医学を学ばつと全国から多くの俊才たちが集い学んだことは有名な話です。

19世紀後半になると、吉田松陰、福沢諭吉、勝海舟、伊藤博文、高杉晋作、大隈重信、坂本龍馬、桂小五郎など、幕末、明治の著名人からも蘭学や西洋の兵学を学んだり、夢や目標を実現すべく長崎にやってきました。

長崎には、西洋のさまざまな分野の学問や知識、それを翻訳・研究し伝える人、



若き日、蘭学を志して長崎に遊学した福沢諭吉 (1835~1901)

諭吉が滞在した光永寺 (長崎市桶屋町) (長崎大学附属図書館蔵)



諭吉が使用した井戸 (長崎市出来大工町)



そして学ぶ人がいました。いわば、街全体が大学だったと言えるでしょう。ここで、重要な役割を果たしたと思われるのが、当時の長崎の人々です。他者に温かく、寛容な長崎の人々は全国からやってきた若者を受け入れ、異郷の地での日々の生活をあれこれ面倒をみてくれたに違いありません。

俳人 去来が長崎を去るとき日見峠で詠んだ君が手もまじるなるべし花薄<sup>はなうす</sup>は長崎人の性情そのものです。

現在も観光地として、他所の人々を温かく迎えて、路上で道を聞かれたときは自ら目的の地まで案内する人も少なくない長崎の土地柄は、その当時から培われてきたものと思っています。私自身も23年前、医学部の教授として赴任して以来、何かと地元の人のお世話になっており、そういった土地柄を実感しています。

**幕末の有志たちが学んだ  
長崎海軍伝習所**

ペリーが浦賀に來航した2年後の1855年(安政2)、幕府は防衛策として、長崎海軍伝習所をつくりました。洋式海軍の設立とその人材育成が目的でした。この時オランダは、250年に及ぶ幕府との友好を記念して、1隻の蒸気艦「スピン号」のこの観光丸を日本に寄贈しています。

その後、幕府は蒸気船「ヤバノ号」のこの咸臨丸をオランダの造船所で造りました。1857年(安政4)長崎に廻航さ

れたヤバノ号にはオランダから派遣されたカッテンディーケ海軍中佐をはじめ航海術などを教える教師陣30数名が乗っていました。彼らのもとで、幕臣や藩士、長崎の地役人たちが伝習生として学んでいます。



長崎海軍伝習所図・復元画(鍋島報効会蔵)

府の方針変更で閉鎖されましたが、その存在は長崎大学のルーツとなる新たな知の潮流を生んでいたのです。

「医学伝習所」に附随して1861年(文久元)、日本初の西洋式病院、養生所<sup>じやうじやうしよ</sup>がつくられました。ポンのあとを継いで来日したオランダ人医学教師ボドウィン<sup>ボドウィン</sup>は1864年(元

治元)養生所内に「分析窮理所」(理化学校)をつくりました。これがのちに長崎大学薬学部となります。

「医学伝習所」設立以来、長崎は医学、薬学の情報発信源となり、この時も医学を学ぶために大勢の若者たちが長崎を訪れました。



日本の近代医学の発展に貢献したボンペ 1829~1908 (長崎大学附属図書館医学分館蔵)



上野彦馬(1838~1904) (長崎大学附属図書館蔵) ボンペに師事し含密<sup>くわんみつ</sup>化学を学んだ彦馬は、日本の写真術の創始者となった。

(化学)を学び、日本の写真術の創始者となりました。

「長崎海軍伝習所」は1859年(安政6)幕

そして、明治維新後もこのような知の土壌を背景に、長崎はわが国で高等教育機関の整備がもつとも進んだ都市のひとつとなつたのです。長崎大学の各学部につな



長崎の小島に開いた「養生所」 (長崎大学附属図書館医学分館蔵)

- 1874年(明治7) 小学校教則講習所設立 **教育学部**
- 1905年(明治38) 長崎高等商業学校設立 **経済学部**
- 1921年(大正10) 長崎県実業補習学校教員養成所水産科設立 **水産学部**

明治から大正・昭和初期にかけて、日本の文学界に南蛮ブームが起きました。1543年(天文12)、ポルトガル船の種子島漂着にはじまり、江戸時代初期のキリシタン弾圧にも忘れ去られていた南蛮文化が再び注目を集めたのです。

南蛮ブームのさきがけとなったのは、「五足の靴」と呼ばれる一行で、1907年(明治40)夏、与謝野寛(鉄幹)、北原白秋、吉井勇、木下幸太郎、平野万里の5人の若い文人たちが南蛮文化の幻影を求

**南蛮ブームで  
文人らも次々に長崎へ**

がる教育機関も次々に誕生しました。



今も異国情緒が色濃く残る長崎の南山手～東山手地区



右から永見徳太郎(長崎の実業家)、武藤長蔵、芥川龍之介、菊池寛(長崎大学附属図書館経済学部分館蔵)

めて九州各地をめくりながら新聞に紀行文を著したものです。彼らは、かつて南蛮文化に彩られた街・長崎にも訪れ、他にはない異国情緒の風を感じたようです。そして、島原、天草とその足跡を残してきました。



吉書茂藤(長崎大学附属図書館蔵) 歌人では他に齋藤茂吉、与謝野晶子、若山牧水、九條武子、新村

出など。俳人では高浜虚子、種田山頭火、水原秋桜子など。作家では芥川龍之介、菊池寛などが長崎を訪れ、この街に大いに魅力を感じたようであります。

この中で、特に長崎大学にゆかりのある人物といえば、齋藤茂吉です。1917年(大正6)、長崎医学専門学校(医学部前身)の教授として赴任。長崎高等商業学校(経済学部前身)の教授、武藤長蔵と親交を深めました。

**原爆被災大学としての使命**

明治から昭和にかけて、近隣諸国との

長崎学から受け継がれる

長崎大学の理念と教育目標

長崎大学は、長崎に根づく伝統的文化を継承しつつ、豊かな心を育み、地球の平和を支える科学を創造することによって、社会の調和的発展に貢献する。

長崎大学は、出島を介した「勉学の地」としての誇りと「進取の精神」を受け継ぐとともに、宗教や科学における非人道的な負の遺産にも学び、人々が「平和」に共存する世界を実現するという積極的な意志の下に教育・研究を行なう。そして、蓄積された「知」を時代や価値観を越えて継承し、人類を愛する豊かな心を育て、未来を拓く新しい科学を創造することによって、地域と国際社会の平和的発展に貢献する。



原爆投下直後の長崎医科大学附属病院(林重男撮影/長崎原爆資料館提供)

戦争がありました。そして、1945年(昭和20)8月9日、長崎に原爆が投下され、死傷者約15万人という大惨事となりました。

長崎大学では、爆心地にほど近い長崎医科大学(医学部前身)の角尾晋学長以下教職員学生897人が亡くなり、壊滅的な打撃を受けました。私は、原爆で亡くなられた先輩たちは生きておられたらきつと素晴らしい仕事をされたに違いない、われわれは原爆により無念の死を

遂げた先輩の分までよく学び、よく生きなければならぬ」と常に訴えています。原爆被災大学としてその惨状を語り継ぎ、平和の大切さを次代へ伝えることは長崎大学の重要な使命だと考えています。

独自の歴史を歩み多くの人が学び舎とした長崎。長崎大学はこの街に脈々と流れる知の大河の中で生まれました。広い意味でとらえれば、上野彦馬も福沢諭吉もみな長崎大学のOBであると言えるでしょう。

長崎大学は、この知の歴史と平和への意志を持。長崎ならではの理念と教育目標を掲げています。この地でしか感じられない、この地でしか学ぶことのできないものがあるのです。学生諸君はそれを体得して世界に羽ばたいてほしいと願っています。

【参考文献・資料】 出島のくすり(長崎大学薬学部編) 長崎遊学の標(長崎文献社編) 長崎事典(風俗文化編)(長崎文献社発行) 辞書遊歩(園田尚弘若木太一編) 江戸幕府と海外情報(宮内庁書陵部主任研究官 沼倉延幸/平成18年度純心長崎学講座資料) 西海の南蛮文化探訪 五足の靴(鶴田文史/長崎文献社発行)